実践的自治会町内会論

地域一体となっての防災まちづくり・コミュニティ防災の取り組み

京都府大山崎町　鏡田連合自治会　自主防災組織



はじめに

京都、大山崎町は大阪と京都の中間に位置し、豊臣(羽柴)秀吉、明智光秀が天王山の麓で天下を争った「山崎の合戦」で知られています。また、桂川、宇治川、木津川の3つの大河川が合流する地で古来より交通の要所として栄えてきました。今では自然豊かな子育ての町として知られています。鏡田地域は高度経済成長期の開発によって住宅建設が進み、その開発毎に5町内会が結成され、それぞれ運営されていたのですが、昭和51年に連合自治会として再結成され、その後も追加、再編がありながらも、現在４５０世帯、約１２００人の組織構成で活動しています。

再編当時の住民層の中心は働き盛りの子育て世帯で出身地等が異なる寄り合い世帯ながらも「子どもたちのため」共通の願いで地蔵盆や体育祭、スポーツ行事や自然体験等に親同士がまとまり地域の絆を深めていました。しかし現在は、かつて中核となって活躍されていた人がリタイヤ世代となりながらも自治会活動を担って来ましたが、現役世代は働き方や生活様式の変化等で自治会活動への参加意欲が弱まり会からの脱却する方が増えて来たことから、役員負担軽減のため1年交代制を導入したのですが、継続的な活動が難しくなり組織継続、存続も危ぶまれる事態が生じて来たのです。

自治会役員の任期が単年であるのに対し、自主防災組織は自治会傘下ながら取り組みの継続性を考慮し、長期間に亘って委員を務められる人を選任し、自治会役員と協調し、地域づくりの再生をめざし平成22年に「楽しく防災活動をやろう」を合言葉として自主防災組織を結成しました。


町主催防災(DIG)学習会に参加の様子

その後、鏡田地域では過去に4回の水害、最近では平成24年8月13日からの台風による大雨で内水氾濫によって床上浸水、そし

て今から31年前の阪神・淡路大震災では建物の半壊、屋根瓦の落下等、平成30年の大阪北部地震や台風21号において建物の亀裂や屋根瓦等の被害を受けました。そのことによって、住民がお互いに助け合い、励まし合う互助の精神に基づき、自主防災活動を行うことが必要との意識が高まりました。地震・火事・風水害等の災害による被害の軽減をめざし、平時から万全の備えをしておくことが重要、いつ起こるかも知れない災害に対応するには、組織として、日頃から、防災に関する知識の普及、啓発を図ると共に、防災訓練を実施して、防災のノウハウを身体で覚えておくことが必要です。また日頃から防災体制を確立しておき、災害発生の場合は迅速に、効果的に活動できるようにしておかねばなりません。

そのため地域で子どもたちを対象としての事業、自然・木工等の体験プログラムで活動している「鏡田自然体験クラブ」や「女性クラブ」のスタッフとつながって活動を行っています。それらのことによって防災のレベルが高まり、組織運営面でも助かることが多々あります。

地域の人とコミュニケーションをとる

自主防災組織を結成してから16年が経過、自治会において高齢化が進むなか、災害時に活躍できる人材を確保するには日常生活の中にある防災を実践し「仲間づくり」を通して、地震や大雨等による災害の影響を乗り越えて来ました。その結果、自治会では、防犯も防災も関心を持ってもらうことが大切と考えられ、子どもからお年寄りまで、地域住民を巻き込んで啓発・意識改革につながるような活動が行われるようになりました。

コロナ禍の時期に感染を避けるために独自の防災学習や防災訓練を実施するのが困難な時期がありましたが、その3年間を除いて毎年防災訓練を実施、町主催の防災リーダー養成研修に送り込み、資格「防災伝道師」を取得してもらっています。そして今では「防災士」が6名となり、その方たちが中心となり、地域コミュニティの必要性の背景は「共助」だと地域住民に声掛け、協力し合おうと訴え、牽引役となって地域防災力を高める機運をつなげてくれています。

「オレンジタオル」を使い安否確認訓練

防災とは大切な人を助けるためのもの。その重要性は感じていても、なぜ地域で防災をしなければならないかという根本原理が理解されていないことに気づきました。自主防災組織を結成してから16年が経過、その後にコロナ禍となり不本意な3年となりました。しかし、コロナ禍だからと言って災害は待ってくれません。訓練だからと言って組織の一部の役員だけの参加では住民全体の意識高揚が図れないことを懸念しながら、自治会加入世帯だけでなく、未加入世帯も巻き込んだ安否確認訓練を実施しました。

内容はシンプル。「大地震発生を想定して家族の無事を確認した場合、オレンジのタオルを外から見える所に掲出して指定した避難所まで避難して頂くこと」にしました。役員が分担して地域を廻り、タオルを掲げていないところに声掛けをして回り指定避難所で報告。結果は大きな効果が認められました。今では自治会と自主防災組織が協働して「避難行動要支援者」の名簿を作成し、自治会役員等に説明し、災害時に実効性を高めるために協力を呼び掛けています。

地域での取り組み内容を住民と共有する取り組みとして地域でお互いを知る。地域で避難のことを考える。出来ることから実行する、をめざして取り組んでいます。

高めよう地域のつながりと災害への備え

毎年、防災ニュースを発行し、様々な取

り組みについて知らせるだけでなく、防災に関する知識や防災・減災への備えを呼び掛けると同時に、地震の時の一次避難所になっている公園に集まり、そこに設置してある防災倉庫の中のトイレ、テント、リヤカー等の資機材を確認するだけでなく発電機を動かしてライトをつけたり、ジャッキで物を持ち上げたりする実地訓練もしています。


防災倉庫の資機材を確認

夏には地域の地蔵盆での集まり

地蔵盆ではお地蔵さんに主に子どもとその保護者がお参りし、こころを清め、第二公園(新幹線高架下)に移動し、輪投げや釣り、福引などのゲームで楽しみ景品のお菓子を手にしてはしゃぎます。自治会や子ども会や自主防災役員、ボランティアの大人の協力で焼きそば・かき氷を頂くことができます。


夏の地蔵盆でお詣りする子どもたち

また、自然体験活動グループでは各種の工作づくりを提供、自主防災組織からは今年は「災害とトイレ」をテーマとして展示説明を行い、関心を高める取り組みを行いました。子どもから大人まで、約200名が参加。「地蔵盆」は近所で交流できる大切な機会として、楽しみながら防災意識を高めてもらえる取り組みとなっています。



地蔵盆に合わせて「災害とトイレ」について展示説明を行う

秋には百人規模の防災訓練

大山崎小学校をメイン会場にして、町や消防署・社協の協力を得て、救助や搬送、消火(消火栓の使用法やバケツリレー等)、煙体験、避難所づくり体験などを行ってきました。炊き出しや防災ゲーム等の楽しいイベントを企画(マンネリ化しないように「ふれあい防災祭り」のネーミング等)で実施しました。

参加者や新たな指導者の気づきとして、住民参加型としていることで女性の声を反映した訓練計画が出来上がり、面白さと新

鮮さがありました。災害はいつ起こるか分からない！　女性にできることって何か？災害時に「日頃の活動」をさらにパワーアップし女性が本部スタッフ(役員)に入り、協働している姿を目にして安心しました。バケツリレーはコミュニケーションを高める効果がある。そして楽しい。AEDの扱い、応急手当、消火器の使い方の学習では繰り返し訓練しなくてはならないことに気づいたとの声が出ました。

小学生を中心にした鏡田オリエンテーリング

子どもたちがグループに分かれて、鏡田地域全体を巡り、防災に関するクイズ、マンホールや危険箇所、防災拠点となる施設等や110番の家等を確認し、防災・防犯の意識を高めています。そのことを踏まえて、防災マップを作るというものです。参加した子どもたちと一緒に参加した保護者も防災について学び考える場となっています。

豪雨災害を踏まえた避難のあり方

地域は水害リスクが高いという地理的特徴を全世帯と共有し、緊急時連絡網を整備すると共に定期的に避難誘導・安否確認の活動を行っています。特に災害時、自力で避難が難しい高齢者や障害者への支援には、隣近所の協力が必要であることを地域内に浸透させるため、全住民への意向調査を終え、災害時の声掛け、避難支援を呼び掛けています。

終わりに

鏡田地域は、高齢化や価値観の多様化が進む中、激甚化する災害への対応策も複雑化を増しています。「災害は忘れたころにやってくる」常日頃から防災を意識し、関心を持つことがとても重要ですが、地域で何も災害が起こらなければ、地域の防災意識は低下し、地域の交流がなくなれば、やがて、地域の希薄化は必ず進行します。

防災は、地域にとっては、これからも決してなくならない問題ですが、逆に言えば、防災という、地域で共通した課題があるからこそ、地域の人々が協力し合おうという力が生まれるのであって、その力を最大限発揮しようとする取り組み、つまり、コミュニケーションを図り一緒に防災について考える試みを絶やさず続け、次の世代につなげることが重要であると考えています。

引き続き、持続可能な地域を目指し、行政や多くの支援者の方々と共に対策を講じていきます。住民に自主防災組織のことを知ってもらえるように工夫をしていきます。

それには住民とのふれあい、コミュニティ、住民の横のつながり、地域全体での情報共有、状況に応じた避難行動など、自分の命は自分で守る。地域は地域で守る。自助・共助・協働の取り組みを中心に、行政の公助による補完体制を構築しながら、引き続き自主防災組織活動を通して、自治会の活性化に寄与し鏡田地域を守っていきます。

(大山崎町鏡田連合自治会相談役・
自主防災組織前会長　山本和俊)



鏡田オリエンテーリングでは、子どもたちが防災まち歩きを行い防災マップを作る